

スクリャービン初期の作曲様式について

—ピアノ・ソナタ第3番をめぐって—

学校教育課程 音楽選修

04111057 山下慶子

I. 論文の構成

はじめに

1. 『ピアノ・ソナタ 第3番』(作品23) 作曲までの経緯

1-1 スクリャービン誕生から、モスクワ音楽院時代まで

1-2 モスクワ音楽院卒業後から、『ピアノ・ソナタ 第3番』(作品23) 作曲まで

1-3 スクリャービンの年譜(初期)

2. 『ピアノ・ソナタ 第3番』(作品23) の分析

2-1 『ピアノ・ソナタ 第3番』(作品23) の概説

2-2 第1楽章の分析

2-3 第2楽章の分析

2-4 第3楽章の分析

2-5 第4楽章の分析

3. 分析結果についての考察

おわりに

参考文献

II. 研究の動機

『ピアノ・ソナタ 第3番』(作品23) は、初期の作品に分類される。スクリャービンといえば、ロシア象徴主義のサークルと交流し神智学に傾倒していった中期と、一段と緊密になったロシア象徴主義との交流を通して、神秘主義的な音楽思想を展開し、独自の和声システムの確立・調性からの離脱を実現した後期の作曲活動が主に知られている。一方、後期ロマン派のような作風を示した初期の作品は、注目されることは少ない。しかし、私にとって初期の作品は、技巧的で迫力があり、叙情的で美しい旋律を持ち魅力的である。

そこで、初期におけるスクリャービンの作曲活動やその背景となった出来事について調べ、『ピアノ・ソナタ 第3番』(作品23) の分析を実践し、後に神秘主義に傾いていったスクリャービンが、この時期にどんな作曲技法を生み出したのか解明したく思い研究に取り組んだ。

III. 研究の概要

『ピアノ・ソナタ 第3番』(作品23) を分析した結果、スクリャービン初期の作曲技法において次のような特徴が見られた。

①構成

『ピアノ・ソナタ 第3番』(作品23) を分析した結果、大幅な省略と圧縮が見られた。これは、スクリャービンが学んだモスクワ音楽院の創設者及び教授でもあった作曲家チャイコフスキーの再現部における省略法・圧縮法に影響されたと考えられる。

次に、ブリッジによって第3楽章と第4楽章が切れ目なくつながっていることから、楽章の連続性があげられる。

また、主題や動機の循環も見られ、それによって全楽章を通しての統一性がもたらされ、スクリャービンが後に編み出す1楽章形式のソナタという構成法への萌芽が見られる。

②ピアノリズム

ピアノリズムの特徴として、まず、右手と左手でリズムの違う複雑なリズム法（ポリリズム）が多用されていることがあげられる。

次に、右手と左手の拍節感のずれた複雑なピアノ書法（クロスフレーズ）が見られた。

また、拍頭や強拍に最低音が来るのを避けた伴奏書法（第4楽章ブリッジ左手最低音の保続音 cis など）も見られた。

最後に、左手の3オクターブ程の音域に渡った伴奏（左手の音域の拡大）も見られ、作曲家であり、優れたピアニストでもあったスクリャービンは、ピアノリズムにおいても様々な工夫を凝らしていることがわかった。

③和声

和音形体：短7和音（ $\text{II}_7 \cdot \text{VI}_7$ など）、長7和音（ $\text{I}_7 \cdot \text{IV}_7$ など）、ナポリⅡ度の長7和音など

の高次堆積和音や、7の和音、属9およびその根省、属7・属9の第5音上方・下方変位和音が多用されていることがわかった。

※上方・下方変位は、スクリャービンは後に愛用する神秘和音へとつながる。

和音進行：直接的なD-Tを避けて、多様な偶成和音を使用し、特に半音階的なパターンの偶成和音が見られ、また半音階的な偶成和音群も見られた。

次に、第2主題が II_7 で始まったり、ⅢがⅠの代用でTとして用いられたりしたことから、意図的に主和音を避ける傾向が見られた。

また、古典和声にはない並行和音が使用されたり、ドリアⅣを使った変終止（+Ⅳ→Ⅰ）が見られたりした。

転調：異名同音的転調や、偶成和音的な進行がきっかけとなる転調、遠隔調への転調が見られた。

反復進行：D 2度下行形反復進行、S 3度上行型複合反復進行、D 2度上行型反復進行が見られた。

しかし、これらの反復進行は準固有和音や増3和音が多用されていて非常に不安定で、拡大解釈をしてなりたっているものもあり、多義的である。

このようにスクリャービンは古典的な反復進行を加工して、近代的な響きの複雑な反復進行を用いている。

転位音：複数の同時転位音、半音階的経過音、刺繍音や経過音などの転位音の多用、連続倚音や連続刺繍音などの連続転位音が多用されていたことがあげられる。また、和音内では解決せず後続和音で始めて解決する全長転位も使用されていた。

このように転位音を様々な形で駆使することで、より緊張感のある繊細な響きを導き出している。

スクリャービンはショパンが転位音を多用していたことに影響をうけて、さらに発展させた使用の仕方をしたことがうかがえる。

[考察]

ロシアのショパンと呼ばれていたスクリャービンは、初期の作曲活動において、ショパンやワーグナー（管弦楽曲において）が確立した半音階的な和声法を受け継いで、無調の一步手前の、機能と声の発展の終極的段階における極めて個性的な素晴らしい作曲技法を試みたようだ。